

平成 29 年 12 月 21 日 (木)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 山村浩二さん WS 夢の表現の変遷

1,4 回目のご来館

山村さんからは前々から古典に登場する夢の表現にご関心がおありとうかがっていたため、4 回目の本日は入口敦志先生（当館准教授）に、夢の表現について図像学的な観点からレクチャーしていただきました。

2, 夢の表現の変遷／吹き出し型の夢

図 1 は、江戸時代に出版された黄表紙（大人向けの絵本）で『金々先生栄花夢』^{きんきんせんせい えいげのゆめ}（恋川春町作・画、1775 年刊）という作品の一頁です。

この作品は、主人公が昼寝をしている間に大金持ちになる夢を見るという内容ですが、横になっている男の首のあたりから吹き出しのようなものが出ていて、その中に夢の内容が描かれています。この表現は、江戸時代の絵画でよく見かけるものですが、ずっとこのような形であったわけではなく、中国からの大きな影響を受けながら変遷しており、入口先生によるといくつかのパターンがあるようです。



図
1

夢と現実との境目に注目すると、区切らない表現、吹き出し型の区切りがある

もの、雲形の曖昧な区切りがあるもの、という 3 つの型があるそうです。『金々先生栄花夢』のような吹き出し型は江戸時代中期頃から現れ始めたようですが、実はそれよりも随分早く中国では見られていた表現であるにもかかわらず、なかなか浸透しなかったそうです。というのも、日本では夢と現実との境目を曖昧に描いていることが多く、実線で区切ってしまうことに抵抗があったのでは？とのことでした。そういえば、『金々先生栄花夢』の吹き出しも、よく見ると何本か線を重ねて輪郭をぼかしているようです。

この解説をうけ、日本と中国とでは夢と現実の関係の捉え方が違うのでは？という話題にまで発展しました。

¹ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200015145/viewer/5>

平成 29 年 12 月 21 日 (木)

3, 古典籍を見る

その後、木越俊介先生(当館准教授)によって当館所蔵の資料が机一杯に広げられました。

なかには『金々先生栄花夢』²の現物や、同じように吹き出しが描かれている『雨月物語』(図2、上田秋成作、1776年刊)³もあり、山村氏は熱心にご覧になっておられました。



図
2

また、板木と、それを摺った板本の比較が行われ、彫の精確さに一同どよめいたり、入口先生ご所蔵のベトナムの板木と日本の板木とを並べて違いを観察したり、資料を囲んでの興奮が続きました。

² 99-132-1~2

³ 99-125-1~2

